

文章中の現場指示的な指示語の用法について

——随筆中の「この」を中心に——

小林 由紀

【キーワード】 指示語、この、あの、現場指示、文章

1 はじめに

これまでに指示語については多くの論文が書かれてきているが、文章中の指示語については扱いが限られ、全体の体系的な整理はされてこなかったように思われる。^{※1} 文章中の指示語については、書かれた文章という、目の前に相手がいる会話の場合とは異なった環境との関係を見つつ用例を整理することが必要なのではないかと考える。

文章中の指示語の体系的な整理の試みの一部として、本稿では随筆中の「この」について、いわゆる文脈指示ではない用例の一端を見てみることにしたい。

随筆を対象としたのは、小説とは異なり、筆者とは別の人が語っているかのように書くということが基本的にはなく、書き手の位置が比較的明確で、指示語のコ・ソ・アの基準となる「今・わたし・ここ」がわかりやすいからである。また、全体の文脈が把握しやすい長さであるということも理由である。

用例はすべて日本エッセイスト・クラブ編の'91年版～'00年版『ベスト・エッセイ集』（文藝春秋）からとった。〔 〕内の最初の数字は何年度版かを表す。また、文章の最初から引用したときには、最初に〈冒頭〉、文章末までの引用のときには最後に〈終〉と入れた。尚、元の文章の振り仮名は全て省略した。漢字の字体も機器の関係で元のものとは異なっているところがある。また、用例の下線、波線はすべて筆者が付した。

2 先行する部分に「文脈」のない「この」

通常、文脈指示用法の指示語は、前に何らかの言及があることを前提として、使用される。^{※2}

- (1) 〈冒頭〉 コルシカには一度行きたい、とかねがね思っていた。コルシカと言えば、日本人ならナポレオンを想い浮かべる。実際この島を訪れる日本人の大半はナポレオンのファン、あるいは熱狂的な崇拝者であるという。[00「バステリカの幻の栗の樹」奥本大太郎]
- (1) は文脈指示の例と言ってよいと思うが、前の文で「コルシカ」について

言及し、次の文で「コルシカ」と繰り返すかわりに「この島」を用いている。コルシカについては特に書き手がそこにいるといった文章外での状況があるわけではなく、文章の先行する部分でコルシカのことを言っているから「この」を使っていると言える。つまり、先行部分に言及する表現があることがこの「この」が使える条件となっていると言うことができる。これに対し、先行部分に言及がなくても使える「この」がある。例えば次のようなものである。

(2) 〈冒頭〉 去年の秋、『広辞苑』や『大字典』、それに、みそやカレー、うどんにゴマ油まで背負って、はるばるこの外国の町パリに來てから、驚いたことに、すでに十カ月経ってしまっている。

今どき、外国に一年ほど滞在するなどという体験は、少くとも近頃の日本では、たいして珍しい話ではなくなっているようだし、それにこれが、誰も名前を聞いたことがないような不思議な場所に身を置くのならないと知らず、あまりにもよく知られている、パリなる大都会に住むのだから、大騒ぎするにはあたらないという感じがする。〔93「一年のおわり」津島佑子〕

(3) 〈冒頭〉 現在東京都美術館で開催されている「冷泉家の至宝展」が大変好評で、連日記録的な数の人々が見に來て下さっている。この原稿が活字になる頃には、新記録を樹立して東京展の幕が降りようとしているだろう。姫路、名古屋、仙台、福山、福岡そして京都と続くこの巡回展への確かな手応えを今感じている。〔98「冷泉家の『放下すの嫌い』」冷泉貴実子〕

(2)と(3)は文章の冒頭から引用してあるが、「外国の町」や「原稿」について先行部分に言及する表現がない。このように、先行部分に言及する表現があることを前提としない「この」の用法が、文章中にもいくつか存在する。

本稿では、それらの用法の中で、特に書き手、読み手のいる現実世界、状況と何らかの意味で関わりをもつような「この」について概観してみることとしたい。

3. 書き手・読み手の現実のモノ、状況、場所などに関わる「この」

2. で述べたような「この」は、書き手、読み手との関わり方において大きく三つに分けられるように思われる。「このN」(Nは「この」のかかる名詞、以下同様に表記)が、①文章そのもの及びそれに付随するものを表す、②書き手と読み手が共有すると考えられる時空間や状況を表す、③書き手自身の周辺のものや場所を表す、の三つである。

①については、書き手が読み手の目の前に提示できるものであり、現場指示にかなり近いということができる。②については、かなり抽象的なものが増えるが、書き手は文章外の状況などが利用でき、読み手の側も文章外の知識を利用する。ただし、書き手と読み手が状況を共有すると言っても、それは書き手側の想

定では、ということであって、実際の読み手が本当に共有しているとは限らない。例えばある文章を時間が経過してから読めば、現実の状況は異なっていて、ずれを感じることもあるだろう。①に比べて②の方が文章と「このN」で表されているものとの関係が変化しやすいと言える。③については、目の前になく、読み手と共有された状況でもないので、使われ方はかなり限定的になる。

3. 1. ① 文章そのもの及びそれに付随するもの

書き手が読み手の目の前に提示して「この」とさせるようなモノは、文章とそれに付随するものだけである。⁴³上にあげた(3)もこの例にあたる。他に次のような例がある。

(4) 辞書を引かなくなる、というひとがいるが、どうしてどうして、適切な漢字を選んだり、意味を調べなおしたり、同義語をさがしたり、さらに自分の知らない漢字が画面にとびだしてきて慌てて辞書を開いたり……で、そんなことはありえない。文章のなかに漢字が増える、というひともあるが、この文章を読んでいただければわかるとおり、それは個人的な趣味と性格の問題だろう。〔93「決定版『ワープロの功罪』 玉木正之〕

(5) それだけでなく、容積やら何やらを数字にして計算してみたという。

この話を又聞きできいたとき、新田さんにとって数学は詩のようなものではないかと思ったりした。

さて、この雑誌は、図書についてのサービス雑誌だときいている。

私は、本ほどありがたく結構なものはない、ということの大いに書こうとして、つい新田さんのことを思いだし、話がこんなふうになってしまった。だから、まだ主題にはふれていない。〔96「本の話—新田次郎氏のことども—」 司馬遼太郎〕

文章そのものや文章の載せられている媒体などは、読み手がその文章を読んでいる時点で目の前にあるはずであるから、いわゆる現場指示に近い感覚で「この」と示すことができる。(4)(5)では、前に「文章」や「雑誌」についての言及はないが、特にとまどうことはない。

手紙などであれば、このような「このN」を使って封筒や便箋、同封の写真なども示すことができるだろう。エッセイ集には例がでてこないが、論文や新聞の文章などでは、一緒に掲載される写真や図などについて「この写真」「この図」などと言うこともある。詩や法律の文言などを載せて「この詩は」「この条文は」などと言う場合には、示すものが「ことば」なので、文脈指示とまぎらわしい。しかし、字句の変更ができずにそのまま引用されるようなものは、もちろん意味はそ

れに付随するものの、その「形」が示されているとすれば、この①の例となり、ことばで表現された内容が問題になる文脈指示と、一応、境界線をひくことができるのではないかと考える。

ところで、(5)は『本の話』という雑誌に掲載されたものが、翌年の『ベスト・エッセイ集』に再録されたものである。掲載誌から転載されてしまえば、「この雑誌」は目の前にはなく、文章として意味がわからないというほどではないが、ああ何か雑誌に載っていたんだな、という別の読み方になってくる。また、次の(6)の例では、書いている人間の時間と読み手の時間がずれていることがわかる。

- (6) パリの大使公邸での晩餐会には、フランス政府の要人もお見えになるといふ。この文が、読者の皆さんの目にとまる頃には、すでに結果は出ているが、「空を駆けるロバ」と同じ様に、空を駆ける土佐ジローと高知の赤牛が、土佐のフランス料理の、出世作になることを願っている。[99「空を飛ぶ鳥と牛」橋本大二郎]

文章の場合には「現場指示的」とは言っても、目の前に人がいて会話するのは異なり、原稿が書かれてから読者に読まれるまでには時間が経過するし、形も例えば「活字にな」ったりして、ずれが生じる余地が常にある。しかし、大きく見れば、やはりこの①は書き手が読み手に現場指示的な形でモノを示していると言ってよいだろう。文脈指示の場合には文章の先行部分の内容との関係で、文章内部の問題なので、外部の影響は基本的に受けず、この①とは異なる。

3. 2. ② 筆者、読者が共有すると考えられる時空間や状況

文章を書き手と読み手とのコミュニケーションとして大きな枠でとらえると、それが行われている時空間、さらにその状況と言ったものを考えることができる。これは、①のように読み手の目の前にはつきり示されるものではないが、少なくとも想定内の読者であれば、言われればすぐ、ああ、とわかるようなことがある。まず場所の例をあげる。

- (7) 〈冒頭〉 かつて、私が子どもだった頃、「軍隊に入れて鍛え直してやる」といった種類の言葉はまだ生きていた。軍隊の経験者がまだ現役で、若い者に劣らず働いていたからだ。いちおう、軍隊はないということになっているこの国では、それは当時としてもありえない状況を口にしていることになるが、彼らの、「勢い」のようなものが、言葉にリアリティを与えていた。[98「父権の喪失」宮沢章夫]

- (8) 〈冒頭〉 夏目漱石が、この地熊本にあつて熱心に句作し、せつせと師正岡子規の元へその句稿を送っていたころ（明治二十九—三十三年）、時同じくして、この地にもう一人、漱石と号する俳人がいたことは、今はほとんど知られていない。

そのもう一人の漱石は、黒川漱石。夏目より十四歳年長で、夏目

の熊本滞在時は四十歳の半ば、この地における知名度は、その社会的地位からして一歩先んじ、当時（漱石）といえ、こちらの方を指していたかもしれない。〔97「もう一人の『漱石』」星永文夫〕

(7)で先行する部分に言及がなくても日本について「この国」と言えるのは、通常、書き手も読み手も日本にすることが前提とされているからであろう。読み手が特に迷うことはない。しかし、もし海外のある国で発行されている日本語の新聞の文章であれば、文脈がないと「この国」で日本を表すことはできないと思われる。

(8)は『熊本日日新聞』に掲載されたものが、97年版の『ベスト・エッセイ集』に再録されたものである。「この国」の例ではないが、熊本で読まれることを想定して書かれた文章であると言える。日本全国の読者に対して書かれたものならば、特に「この地」とつける必要はない。随筆全体を通して漱石の話なので、わざわざ「わたしがいる」熊本、とする理由がなく、後に述べる③の用例でもない。「わたしもあなたもいる」熊本、であり、「この地」と書くことで、熊本の話者とのある種の一体感が感じられるような文章になっていると言える。

次に時間、状況の例をあげる。

(9) 〈冒頭〉 何の商業シャルだったか定かではないが、佇立した少女が片脚を真横にあげて、「私の体のなかを救急車が駆け抜けてゆく。ピーポー、ピーポー……」とつぶやくふしぎな映像が記憶に残っている。

この夏、たとえていえば、そんな風な体験を経て、一カ月近く入院生活を余儀なくされたのは、不養生の祟りというものだろう。〔98「痛みの程度について」小暮得雄〕

(10) 私が長谷寺をたずねたときも、若いカップルが寺の受付で水子供養の申し込みをしていた。どのような事情であれ、人工中絶した胎児への怖れの観念が、このインターネット時代にも生きつづけている。闇に消えた胎児、そこにいのちの存在を覚えるからこそ、供養するのである。水子地藏こそは現代人の揺れ動く生命観を物語るいちばんの物証かもしれない。〔00「電子ペット供養」立川昭二〕

(11) それどころか、カメラはますます小型化と自動化を進め、ポラロイド、「レンズ付きフィルム」、デジタル・カメラと、まるで台所道具のような氾濫を見せている。おりふしの記念写真が毎日の行事になり、その絵姿を印刷して友人に送るのが新しい儀礼になった。家庭でも観光地でも人びとが指をV字型に挙げて並び、少女たちが「ブリクラ」に群がる光景が時代の風俗になった。写真帳はすでに溢れ返っているというのに、誰もが人生の一瞬をどれ一つ忘れまいと、懸命になって絵に留めているのがこの世紀末なのである。〔00「無

(9)の「この夏」は、書き手の「今」の時間を基本としたものである。『ベストエッセイ集』には前年の文章が収録されるから、おそらく1997年の夏であろう。単なる時間表現は、②の用例として見ても、③の用例として見てもよさそうであるが、一般的には、一週間、一ヶ月などかかなり幅のある捉え方ではあるにしても「今」の読者を前提として書かれているので、一応②の用例と考えていいのではないかと考える。

(10)(11)は状況の例である。書き手が不特定多数の読者と共有する状況というと、時代状況のようなものが多いと思われる。時間に関わる語でない例としては、「再就職をしたいと思っている人も多いが、この不景気ではなかなか難しい。」と言った例が考えられるが、今回見た随筆の中には適当な例がみつけれなかった。

ところで、(10)(11)は単なる時間の表現の(9)に比べて、読み手と共有しているということをより積極的に利用している表現である。(10)では、「現代」と言うより「このインターネット時代」と言うほうが、具体的な状況が想起され、説得力が増す。(11)は1999年の文章なので、基本的には読者も20世紀中に読んでいるという前提のもとで書かれていると考えられるが、読み手も含めて私たちがそういう状況の中にいるのだ、というのが文の言いたいところであり、「20世紀の世紀末」としてしまおうとそういう意味にはならない。

この共有されていることを積極的に利用する表現は、「あの」のある種の用法と似ているところがある。例えば次のようなものである。

(12) 〈冒頭〉 今年の夏はいったい何処にいったしまったのだろうか？

六月にゲンジボタルの群飛を撮影しようと、カメラの手入れをし始めた矢先、あの長雨である。それに追い討ちをかけるように台風が相次いで九州を襲った。[94「ひまわりさん」佐々木茂美]^{註4}

(13) 国連の会議場で大のおとなの外交官が「おまえよりおれのほうがこんなに沢山知っているんだぞ」と言わんばかりに英文法の知識を披瀝しては自慢しあうのである。

日本の中学、高校では退屈だなあと思っていて聞いていた英文法の授業だったが、その折に覚えた知識がじわじわと私の頭の中によみがえってくる。日本の新聞や雑誌でしばしば実際の会話には役立たず、むしろ有害でさえあるとしてさげすまれているあの英文法の知識が、俄然ここでは役に立つのである。[94「外交官と英文法」多賀敏行]

「あの」の場合には、書き手と読み手に共有されると考えられるのは知識であるが、この二つの例では、それを積極的に利用している。「あの長雨」は少なくとも93年当時の読み手にとっては、具体的な様子が想起できたはずであるし、「あの英文法の知識」は長い修飾語がついてはいるが、「ああ、そう、あれね」という

自分の体験に照らした理解を要求している表現と言えるだろう。

会話の中でも次のような例がある。

- (14) 見ると僕より一つか二つ年長らしい中学生が、ボロ毛布をかけた荷車を引いてオロオロしている。

向こうから朱塗りの箆箆を縄で背負った大きな男が何かわめきながら来る。

「馬鹿野郎！ この人混みに荷車とはなんだ！ こんなちっぽけな荷物、自分で背負えねえのか！ ダラシのねえ！」[96「小さな思ひ出」谷口千吉]

関東大震災で逃げ惑う人々の描写である。この部分のやりとりを会話の用例として見ると、「この人混み」は話しかけられた男と中学生が共有している状況である。そして、「人混みに荷車とはなんだ！」という表現と比較すると、男の「この人混みに荷車とはなんだ！」という非難は一般的に人混みで荷車を引くなどいうことではなく、今二人がいるとんでもなくひどい「人混み」で荷車を引いていることに対してのものだということがわかる。中学生は、「この人混み」がどんなものかということは、周囲の状況から読み取って理解することになる。

目の前の状況と、人によっては知らないかもしれない過去に関する知識とでは、理解のしやすさに差があり、思い起こす労力がある分、「あの」の働きの方が意識されやすい。しかし、文章外のものの具体性を利用するという働きの方向としては同じであると言えるだろう。「この」にも、共有された状況を通して、文章外の知識を積極的に利用する場合があると言える。¹⁸⁵

3. 3. ③ 筆者自身の周辺のもの、場所など

書き手自身には関係があるが、読み手側には関わりのないものが「この」をつけて表されることがある。読み手側が共有していないが違和感を覚えないもの、ということで範囲は限られている。

- (15) ふいに私は、故郷の木曾川の砂を見たくなった。子供のころ何度もこの目で見たはずの砂なのに、はてどんな色だったか思いだそうとしても、はっきりとした色が浮かんでこない。淡い褐色だったか、濃い褐色だったか。脳裏から故郷の川砂の色が消えている。[98「地球の語り部 砂の標本」稲葉真弓]

- (16) 車が揺れるたびに匂い立つ茸の香りを嗅ぎながら、この人生で思いがけなく、華やいていて寂しい夏茸の世界を知ったことが、ふと、森敦さんの置土産に思われた。[93「置土産」森禮子]

- (17) 〈冒頭〉 リムスキィ・コルサコフの「インドの歌」やオペラ「マノン」のなかの「エレジィ」のメロディに、いまだにこの年になっても涙するとき老いぼれは、われたガラスの花びんのなかに投げ

こんだままの造花みたいで、われながらぞっとする。〔97「映画のごとく読む」 淀川長治〕

(15) から (17) まで、かなり慣用的であるが、「この足」「この耳」「この身長」など、それなりにいろいろな語と組み合わせることが可能である。これらの例では、書き手に人生や年齢や身体があることは当然のことであることが、共有された状況などでなくても、突然「このN」で示すことが許される理由であろう。さらに、(15) について言えば、「自分自身の」という意味が伝われば、稲葉氏の目がどんな目か具体的に知らなくても十分、という使い方である。(16) についても、「わたしの」ということが伝われば意味は十分通る。(17) については、微妙な例であるが、淀川氏がどのぐらいの年齢かという知識を前提とした表現と言えるかもしれない。例えば作家のよく知られた特徴とかトレードマークになっている帽子というように、「この」の場合には、筆者にとっての「状況」を読み手が共有はしていないが、知識としては知られていて、それが利用されるということはある。これに対し、書き手からの距離感のある「あの」が用いられる場合には、書き手と読み手の両者にとって「知識」であるものが共有される。

次のような例もあった。

- (18) このあいだ新聞で、SOHOということばをやたらに使っている記事をよんだ。マニュアルどおりにつながれば、メールもたのしかろう。実感をいえばつながらないのではメールにもSOHOにもならぬ。ぼくの経験では、なかなか端末はつながらないものだ。端末のケーブルに一日をついやすことだってあった。試行錯誤もかさねるだけかさねろ、とぼくの年若いインストはいうけれど、九歳のとき般若心経の漢字はよめなかったが、ことばは珠数にすれば暗誦できた。コンピューターはそうはゆかない。性にあわない道具が、あわない顔のまま、いまでも、この机のわきにのさばっている。〔00「道具のはなし」 水上勉〕

この例では、先行する部分にコンピューターを使う描写があつて、当然机があることは予想できるものの、その描写を受けて「この机」と言っているわけではない。机は人生のように必ず書き手にあるものとまでは言えないが、ものを書く人の身边にある常識的なものとして、突然もちだしても許されるのだろう。

次に、読み手については問題にせず、書き手のいる場所について「この」を用いる例をあげる。最初にあげた(2)の「この外国の町」もこの例である。

- (19) 〈冒頭〉 アメリカ人は生活の中でライブラリを非常によく利用している国民で、どの州のどの街に行っても、ポスト・オフィスやシティ・オフィスが在るようにライブラリが建っており、住民達はそれらのライブラリを、家庭の書斎のように親しんで利用している。

私がアメリカで初めて図書館へ出かけたのは、雪の多い小さな田舎街のカレッジに通っている頃で、今から三十年以上も前のことであつた。そして、その時から今日に至るまで、私はライブラリをずっと利用している。それは私のアメリカ生活に欠くことの出来ない存在として、実に多くのものを教え、助けてくれたのである。そして何よりも私の心を潤してくれたのは、私が現在暮しているこのニューヨークの街のライブラリに、日本語の書籍がファイルされてあつたことである。祖国を離れ、長い間外国で生活している人間にとって、母国語の書物の存在価値は計り知れないほど大きいものであつた。〔93「ニューヨークの日本語ライブラリ」中尾道〕

- (20) 〈冒頭〉 「両股関節機能全廃」という診断名を持つ体の私だが、特製の靴を履き、杖をついて少しだけは歩ける。絶対に、ころんではならないが……。ころんだならば、人工骨と自分の骨との継ぎめがはじけて、再び私は大きな手術を受ける羽目となるからだ。

だから、めったに表へは出ないのだが、どうしても自分で出かけたときがある。それは郵便物を出すときである。郵便局はこの十階建てのビルの一階にある。エレベーターは三階からしか止まらない。私の住居は二階である。週に一回、新聞に俳句を投句する。月に一度は日本随筆家協会あてに稿も送る。〔93「歯型」笠井康江〕

(19) (20) はどちらも文章の冒頭からの引用で、特に先行部分に言及もなく、自分のいる場所について「この」を用いている。読み手としてはニューヨークは知っているかもしれないが、「十階建てのビル」がどこのどんな建物かはわからない。これらの例の「このN」は、②の場合とは異なり、「外国の町」「十階建てのビル」を具体的に提示するというようなものではなく、「この」が「今わたしがいる」という説明を添えるような働きをしている。(19) では、ただ「ニューヨークの街」と言うのと比べて、今自分がいる、ということが強調される感じになっている。(20) では「この」がついていることでこの書き手のいる場所だということがわかるが、「十階建てのビル」とするとその意味がなくなり、後続の文とのつながりがおかしくなる。

次の例は、「このN」が同じように書き手の場所を表すが、文章の最後の方にあつる例である。長いので途中を略す。

- (21) ニューヨーク郊外の住宅地にあるわが家の持ち主は、やせ型で背が高く、見るからに神経質そうな男である。

〔中略〕

「あつ、あれか」

ふだん気にもとめていなかった庭の電気が数日前に突然ついたらま、消えなくなった。あれこれ家の中のスイッチを試しているうち

に、玄関のクローゼットの内側の小さなボタンを押したのだ。警官が来る十分ぐらい前の話である。それが、万一のときに助けを呼ぶ「パニック・ボタン」だったのだ。

安全はただでは買えない、がこの国の常識だ。海外暮らしは初めてではないが、それにしてもハンパではない防犯態勢には恐れ入る。

このうえは、せつかくの近代兵器を使いこなさねばもったいない。ピストルでも持った本物の「夜の訪問者」が来たら困るもの。(終)

[97「夜の訪問者」北山憲治]

- (22) 今どこにいる？ ぼくはしっかりと受話器をにぎりしめた。佐賀県・唐津の窯場の名をアニタはおかしな発音でくりかえした。なんとそれは**ぼくが仕事をしている岬のアトリエ**から一時間たらずのところになる。この夏のことだ。

[中略]

ビザの関係でいったん釜山に出ることになったとあって、その次の日曜日、アニタはぼくの家に来て泊まった。彼女は仕事着のまま大きなリュックを二つも担いでいて、ぼくの女房を驚かした。

化粧気のないのも以前のままだが、あの頃のアニタは、ブーロニユの森で乗馬を楽しんだりして、ぼくにはまぶしかった。

さあ三十七年後のアニタを描くのよ、そう言って彼女はぼくのアトリエで、老眼鏡をはずすと、あの時のようにポーズをとった。

アニタ、きみはマダムと呼ぶのかマドモアゼルと呼ぶのか。なんにもわざわざ呼ぶことはない……。アニタは小さく笑った。あなたはフランス語を思い出したようね。

彼女が去って間もなく、いくつもの台風がこの海っぱたに襲ってきた。それっきり消息はない。(終) [92「この夏のアニタ」野見山暁治]

(21) (22) では、書き手のいる場所は、文章の前の方の波線の部分でわかるようになってはいるが、その部分をさして「この国」「この海っぱた」と言っているとは言えない。

尚、先行部分にある程度の言及もあり、語られたできごとの背景でもある場所を表す (21) (22) のような例と次の (23) のような例は、似ているところがあるが、一応区別しておきたい。

- (23) 救急車が止まると中から三人の男がばらばらとおりてきた。白衣ではなかった。踏切近くに立っている男たちと違くない服装だった。彼らは何か棒のようなものを降ろした。たたんだ担架だった。長い電車はちょうど真ん中へんに踏切をまたいでいる。電車の前か後ろを迂回するのでは時間がかかると思ったが、彼らは電車の下をくぐ

って簡単に反対側へ出た。そちらを見ると、さっきこの電車から降りていった乗客の女性が胸の上にまたがって人工呼吸をしていた。傍に立っていた乗務員と救急車の隊員は叫ぶように短い会話を交わした。[93「はつかり十五号」吉田知子]

(23) では、電車の事故の体験が語られているが、「この電車」は前にある電車という語を受けて「今言ったのと同じ」電車、と言っているのではなく、「自分が乗っている」電車という「この」であろう。この例では、通常「今」を基準として用いられる「さっき」という時間表現が電車の事故のある時点を基準として用いられているのと一緒に使われているため、「この」が電車の事故が起きた時点の電車の中を基準にしていることがはっきりとわかる。語り手の「今・ここ」は電車の事故が起きた時点の電車の中にある。

この例では、「電車の中」は確かにある意味で書き手のいる場所であるし、その指示語の使い方はある意味で現場指示的でもある。しかし、文章の力でその場面をつくりだして始めて成り立つという点では、文脈により多くを依存している。一方、書き手がその文章を書いている場所は、少なくとも随筆のような文章にとっては、ある程度文章で何が語られるかとは別に、あらかじめ前提となっている位置と考えることができ、先行部分に言及が全くなくても使うことができる。ただし、途中外国に行って書いていたからと②の「この国」を「そちらの国」としたりはしないし、喫茶店で書いていても、「このビル」と書くという程度の虚構はありえるので、そういう意味では、(22)などは、実際にいるのか、いるふりをしているのか、少し微妙なところもあって、境界線上の例であると言える。しかし、現実との関わりという観点から見ると、文脈によってどこでも移っていってしまう(23)のような例とは分けておく意味があると思われる。この(23)のようなものは稿をあらためて別に扱いたいと思う。¹⁶

4. まとめ

以上述べてきたように、文章の中の指示語には、書き手、読み手の現実の状況に関わり、より現場指示的と言える用法がある。随筆中の「この」についてみると、それは大きく三つに分けられる。文脈指示の指示語はテキスト内での問題であるのに対し、これらのより現場指示的な指示語の用法では、文章の環境とでもいべきものに左右される面があり、場合によってはそれを積極的に利用もする。また、このような用法を見ると、文章はただ独立してあるのではなく、会話の場面とは多少違いがあるものの、書き手と想定内の読み手との間では文章をはさんでのある種の場面が成立している、と言えるのではないだろうか。

尚、ある種の表現効果をあげるために、今回のような指示語を使うということはあるが、今回あげたうちのある用法の「この」を使うと必ずある表現効果をあげるというわけではないので、その点については更に別の観点を考慮した整理が

必要であると思われる。

注

- 注1 指示語全体の意味・用法を考える中で、文脈指示の場合にのみ文章中の指示語が問題にされるのがほとんどである。しかし、場面の影響を強く受ける指示語において、会話と文章では場面ということに大きな差があると思われる、文章という環境の中での指示語を整理することは、指示語全体を考える上でも役に立つと思われる。
- 注2 文脈指示には後方文脈指示と呼ばれるものもあるが、本稿の現実のモノなどに関わるということと直接には関係がないので、ここではふれなかった。
- 注3 堀口（1978）では、「話し手と聞き手とが同一空間に共存するという条件がないために、現場指示の用法は、極度に狭められている。」とし、手紙、文章などについて「手紙そのものを指す『コノ手紙』、あるいは同封したものを指す『コノ物』などに限られよう。不特定者への放送・文章では、『コノ放送』『コノ文章』とかに限られよう。」とある。
- 注4 この例については小林（2005）でもとりあげた。
- 注5 「この」「その」「あの」には条件によって、単に特定の一つという記号に見えるものから、非常に具体的な内容を喚起するものまでいろいろあるように思われる。そのことについては稿を改めて考えたい。
- 注6 金水・田窪（1990）では、文脈指示のコを「解説のコ」と「視点遊離のコ」に分けているが、この（23）の例は「視点遊離のコ」にあたると思われる。

参考文献

- 金水敏・田窪行則（1990）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3（日本認知科学会）講談社
- 金水敏・田窪行則（1992）「日本語指示詞研究史から／へ」『日本語研究資料集第一期第7巻 指示詞』ひつじ書房
- 小林由紀（1998）「『先行表現』をもたない指示語 —『その』の文脈指示とは言いにくい諸用法をめぐって—」『国文学研究』121（早稲田大学国文学会）
- 小林由紀（2005）「指示語の表現性—文章中の『あの』を中心に—」中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子編『表現と文体』明治書院
- 坂田雪子（1971）「指示語『コ・ソ・ア』の機能について」『東京外国語大学論集』21
- 堀口和吉（1978）「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8（大阪外国語大学）